妙の光（たえのひかり）

通刊44号 **復刊23号**
1998年7月1日（季刊）
角田山妙光寺 発行
新潟県西蒲原郡巻町
角田浜 〒953-0011
TEL 0256-77-2025

アヒルのガー子

妙光寺いちばんの人気者。じつはもう何代目かで、現在一羽だけで毎日を過ごしている。「寂しそうだからもっと仲間を増やして」と言う声が多いが、意外に気難しい性質で相性が合わないと弱い方が徹底的にいじめられてしまう。だから一時は飼うのを止めた。ところが来る子供たちから「アヒルがいない」とあまりに言われるので、巻町の内藤昭一さんが苦労してやっと一羽探してきてくれた。

このガー子、このごろは参道に座り込んで参拝の人が通ると「ガーガー」と近づいてやけに人なつこい。人が来ないと境内の巡視のつもりか、安穏廟の周辺や駐車場から外の車道まで散歩に歩き回る。ある日とうとう「アヒルが車道にいて野良猫にでも襲われると大変」と知らせてくれた人がいた。囲い込めないし、首輪で繋ぐわけにもいかず困っていたら、こんどは別の人が「首から名札をさげとけば心配ないよ」と言ってくれた。

安穏住職の

寺おこし 心おこし

昨年十月から毎日新聞に毎週連載を書いています。これは名古屋と九州以外の全国に掲載されているそうで、読者からの手紙も結構届きます。これに追われて本誌の原稿が間に合わない。というわけで、今回はこのなかから今年の五月十日、十七日の分を転載させていただきます。ご了承ください。

内容はそのまま、妙光寺が安穏廟の活動を通して二十一世紀を見据えた寺のあり方を考え、実践していきたいことのひとつです。なお本文中にある写真は新聞への掲載はなく、本誌だけです。（念のため）

国際交流 上

留学のチベット僧を援助

小川英爾

70歳に近い世話人の男性がある朝、寺にやってきた。農家の人だから朝が早い。お茶を飲みながら、「新聞にチベットのダライ・ラマのことが載ってたんで関心を持って読んだけど、やっぱりいいこと言ってるね」と言う。

いつもは寺の運営の話と世間話が話題なのが、この日は国際的だった。それは3月末の檀家役員会議で、妙光寺として仏教の国際交流をやろうという私の提案が承認され、チベットの留学僧を援助することになったからだ。

9年前に跡継ぎ不要の墓として永代供養墓を始めた時、墓の問題を通して寺のあり方を考え直していくことが一番の目的だった。そのために、入ってくる申込金は基金にすると役員会議で決めた。その基金の利子でこの墓を管理、供養し、母体の妙光寺の運営を補助する。そして寺を檀家に限らない、開かれた場にするため将来は国際交流もやることにした。でもこの三つ目は遠い目標か夢の話で、本当のことになるとはだれも思っていなかったのが事実だ。

それが永代供養墓の申し込みが予想外に多く、利子収入も多くなった。そこで、国際交流の種まきを始めようというのだ。事前の総代会議では、とりあえず年間50万円にしようという。でもこの金額で何ができるだろうか。

そんなとき私が映画『セブン・イヤーズ・イン・チベット』を見た。ヨーロッパの登山家と、幼いころのチベット仏教指導者ダライ・ラマとの交流を描いた史実に基づく映画だ。これだ、現在インドに亡命を余儀なくされているこのチベット仏教の僧侶たちを応援しよう。50万円でも毎年の継続ができるのだから留学生への奨学金がいい。でも日本での留学生活はこの金額では無理だ。韓国なら貨幣価値も違うから受け入れてくれる大学もあるかもしれない。

そこで韓国で文化財研究所を主宰して、国際交流も手がける友人に相談した。すぐに「国立大学の仏教哲学の先生が、詳しい話を聞いたうえで協力してもいいと言っている」との返事が来た。次は前述の檀家役員会議の承認だ。以前に決めてあるとはいえ、まさか現実になるとは思っていない話だから難航するかもしれない。前の議事録も用意して、チベット仏教の状況から説明した。

ところが意外にも、「いいじゃないか、うちの寺もいよいよ国際的だ」「住職が当初から言ってたことが現実化するんだ」「賛成だが、毎年留学僧から報告してもらおう」と、こちらが拍子抜けするくらいスムーズに承認されて、私は韓国に旅立った。

一般に寺は先祖を守るところと思われている。だから先祖に対する意識が薄れた今、寺の存在

感が弱まってきた。そこで多くの人を受け入れる幅広い交流で、改めて仏教を考える場にしたい。そんな思いが今またひとつ形になることをみんなで実感できるのが楽しい。（僧侶・妙光寺）

国際交流 下

韓国の学者らと意気投合

韓国ソウルに出かけた。妙光寺のある新潟から定期便があって、2時間で行けるから東京に行くのと時間的には変わらない。空港に着いてすぐ友人の主宰する文化財研究所を訪ねた。ここでソウル大学の先生と会う約束になっている。妙光寺が国際交流の目的で、韓国に来るチベット人留学僧に奨学金を出すことになり、その協力をお願いしにきたのだ。

現れたのは人類学の李先生と仏教哲学の沈先生。韓国では高名なお二人と聞いていたが、気さくな人柄にまずほっとした。ところが李先生は堪能な日本語で、沈先生は英語まじりでの質問が始まり、一転して口頭試問の雰囲気だ。「チベット人僧侶が対象の理由は何ですか」「なぜ日本でなく韓国なのですか」。当然の疑問だが緊張してしまう。

「インドに亡命を余儀なくされているチベット人僧侶の現状に、同じ仏教徒として応援したいのです。日本で年50万円の留学資金では足りません。そこで貨幣価値の違う韓国なら可能ではないかと考えたのと、国ごとに異なる仏教の今の姿を、三者が交流して比較しながら考える機会があってもいいのではないかと思ったのです」と答えた。

2人の先生は賛同し、沈先生のルートで留学僧を招請してくれるという。「韓国でもこの金額

では不足だけど、学生寮も提供できるし、何とかなるでしょう。チベット人留学僧はまじめで優秀な人が多いから楽しみだ」という言葉がうれしかった。

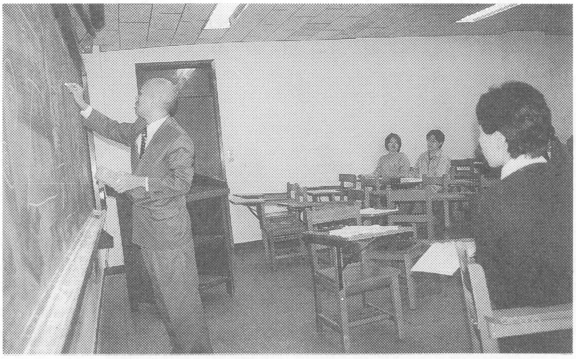
あいだに入ってくれた友人も加わって4人で夕食をとったが、初対面とは思えない盛り上がりだ。そのうち沈先生の言葉に私以外の2人が驚いた表情で沈黙してしまった。韓国語だから私には理解できない。すぐに李先生がニコニコして「小川さん、あさってソウル大学で沈先生の比較仏教学の授業があるから、あなたそこで講義しませんか。これはいい考えですよ」という。沈先生の発案だった。

まったく思いがけない展開だ。一応、大学の講義も経験はある。酒を飲んだ勢いもあって引き受けることにした。2日後友人の通訳で10人の学生に、「住職の目でみた日本仏教の歴史と現状」を2時間話した。学生の反応はまあまあだが、李先生が「じつにおもしろい。次回は私の人類学の授業でもやってほしい」と言う。沈先生は「妙光寺に行きたくなった。夏休み中はどうか」とまで言い出した。

ほそぼそとした寺の国際交流だが、まずは韓国との共通理解が始まった。これからチベット人僧侶、韓国人仏教徒とも縁をむすび、同時に檀家や永代供養墓の会員など妙光寺に集まる人たちに広げていきたい。

寺に戻ってから私の報告に檀家のひとりが、「宗派を否定はしないけど、ほかの国の話を聞いてもっと幅広く仏教が考えられたらいいよな。この話は楽しみだな」といってくれた。

（僧侶・妙光寺）



信心

男が中心の講中

西山講中

地区ごとの檀家で集まる妙光寺の講中は現在七つある。毎月集まるところ、地区内に不幸があったときだけの集まりのところもある。

西山講中は角田麓の西、巻町の間手橋、木島、鷲の木、白山、船戸それぞれの地区の檀家で構成されている。地域は広いがひとつひとつが田んぼに囲まれた小さな集落で、そこに檀家が数件ずつ点在している。講に入っている家は現在十二件、農家が多い。

講の集まり方も地区によって色々で、女性だけ、女性に少し男性が混じる、男女半々、なかには夫婦で集まるところもあるが、平均的には女性の方が多い。全般的に高齢化の傾向にもある。ところがここの西山講中は珍しく、昔から男性が中心になってきている。その歴史も古いようで理由はよくわからないが、出てくるのは爺ちゃんか父ちゃんで、都合がつかないときに婆ちゃんという雰囲気だ。

そのせいか集まりは年二回、春の農作業前と秋稲刈りの後。それと地域に不幸があったとき、通夜と野辺送りに出るのは他の講中と一緒だ。この春と秋は順送りの当番の家に集まり、お経と住職の話、その後会費制で昼食をとる。当番の家に負担がかからないよう、料理の予算と品数を少なめに決めてある。男性が中心に集まるから酒がはいり、講中の進め方、寺の話題、地域や農作業のこと等々、話題が豊富で話は盛り上がる。最近の話題はもっぱら本堂建て替え工事のことだ。

「同じ檀家同士だし、親戚なんかとまた違って気を使わなくてもいいから楽しい。御前様を交えて寺のことも皆で話し合えるし、いいこんだ」と言う。近年亡くなる人が続いて世代も交代し、年齢的に若返ってきたのもこの講中の特徴だ。そのせいか「酒を飲み過ぎた」という問題？　もでてきた。「いや、前には積み立てたお金で温泉に行って飲んだこともあるくらいだからたまにいいよ」という意見もあって賑やかだ。

寺の動き

財政のお知らせ

妙光寺は通常三月に総代世話人会議を開いて、護持会の収支決算ほか妙光寺運営全般について審議しています。その結果は護持会々報として全檀家に報告しています。重複しますがここでもお知らせします。

今年度も会費一万円のご負担をお願いします。現在、松食虫の被害で枯れた松の伐採費用一三〇万と、宗門からの日蓮聖人立教開宗七五〇年特別賦課金三百万の借入金があります。このうえ今年客殿の鉄骨ペンキ塗装が必要ですが、これも借入れで対応し、会費の値上げはしない方針です。

客殿鉄骨を塗装しますが錆が予想以上にひどく、一部のガラスとその押さえ全部をステンレスに取り替えることにしました。その結果合計で六五〇万かかります。これで柱の塗装は十年間不要で、ガラス押さえは錆の心配がなくなりました。それにしても建物が大きいだけに維持費もかかります。

本堂建て替え事業は現在左記の状況です。

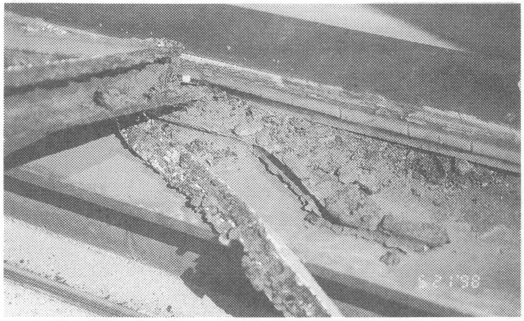
寄付総額　一億九四〇〇万円
入金済額　三六九〇万円

予算額の二億五千万円にはまだまだ届きません。厳しい不況でもありこの計画の困難さが痛感されます。引き続きご理解ご協力お願いします。

第四銀行西川支店の妙光寺口座に送金された方は、受領証を発行しています。定期的な送金、口座引き落とし、各地区取りまとめの方には年末に集計して一月に発行します。

安穏廟は三基目が現在五六件、総数で二六二件の申込です。これによる安穏基金が八五〇〇万円となりました。うち五百万円は住職の生命保険に運用し、もしもの葬儀と新住職の入寺式費用等に充てられます。八千万円を四％で運用し、来年度から三百万余りの利子収入になります。これを維持管理費百万、フェスティバル費用百五十万、そして五十万を社会活動費とします。

これが韓国ソウル大学へのチベット人留学僧を援助する、妙光寺の国際交流の事業です。小さな種蒔きですがいつか大きく成長することを楽しみにしたいと思います。



錆でボロボロになったガラス枠

妙光寺史話

日寿上人著

「臨時得意・年中行事」（三）

四、順廻の節、道案内人を頼む。中食場へは茶袋一ツ二ツ見合せあげる。

村村の割元、名主等へも同じ。もっとも遠藤氏割元本家等へは土産の品は格別にすること。其ほかにも面立（おもだ）ちたる檀那には別に心付けをせよ。宿泊する所も同じ。又曽根、巻両所の代官へは三匁菓子の箱入りを一折ずつ。三根山役所は茶袋二ツずつ。石瀬代官へは三本入扇箱、茶袋二ツ。下役三～四人へは茶袋ばかり。宿泊する処へ鳥目二百文、たばこ半斤ばかり遣す。吸物・酒を出し役所へ案内していただくからである。この次に五ヶ浜へ罷越すべき也。巡礼の間講中にて案内者が一人従う。此の仁へは追て多葉粉（タバコ）等の類見合せ、挨拶に使僧を遣すべき也。

五、入山の年か其翌年か何れにも宗旨改めの節、直参（住職自ら参加）のこと。

三月七日は巻町、同九日は曽根町、同十五日は三根山也。右役所方割元へ茶袋二ツずつ持参。もつとも曽根、巻両所は是より後、中二年ずつ間を置き三年目毎に各番に直参。三根山は五～七年に一度直参たるべし。其外は是好庵にて相済む也。直参の節の人足は其の前日、其の所の檀那中より来る。此外三月上旬より所々村々判形の義申し来る。所化（弟子）にて相済む。

六、檀越が死亡した時

出るか出ないかは要請の有無によるべし。当村役人や寺方の葬儀には住職が直諷経、そのほかは小児であろうとも弟子を諷経ならびに悔等に遣すべきこと。

右大極はその時々のよろしいと思われることに従うべし。しいて先例も無いようだから諸事詳細に記すことが出来ない。

〔年中行事〕

正月

○元日正暁七ツ時（午前四時ころ）梵鐘の音と同時に出堂勤経、六ツ時（六

時ころ）雑煮を食べる。
　五ツ時（八時ころ）から村人が年始に来る。村役人には冷酒に昆布、他の者には濁酒を出す。越前浜役人五～六人、今明両日のうち揃って来る。銘々盃・昆布、或は名主へ盃遣しあとは順盃にてもよし。其次に濁酒を出す。
　此日在辺檀那も十軒ばかり来る。
○二日　正六ツ時出堂、勤行。在辺旦那中大方来る。兼て銭百文包、五十文包を拵いおく。割前より来る人に頼み百文を汰上の渡し場へ、曽根の人に五十文包を鈴木の渡し場へ頼み、年玉に遣す。是にて年中渡し銭はいらぬ也。
（上欄朱書入レ）
「吸物・酒を出すのは願正寺ばかり也、庄屋等は□□にて酒を出す」
○三日　残りの檀越、連々絶えず。此日より五ヶ浜上け斉（トキ）あり。村内面立ちたる檀那は十日頃までに連々お願いに来る。
○四日、村中ならびに越前浜役人、寺方年礼に来る（此分大方三日までに来る）出酒・昆布・吸物・于温飩あるいは素麺の煮かけ也。
○五日、村中ならびに越前浜役人中へ返礼、寺方も同じ、惣体へは煎餅袋一ツずつ。役人、寺方へは桐箱添える。
（上欄朱書入レ）
「年礼の節、庄屋へ十ぱのり入に色水引かける。願正寺へ六ぱ、二軒へ扇子箱添える。組頭二軒六ぱ是も同じ、扇子箱添える。村総代にも桐箱遣す。大滝にて方便品、自我偈よむ。作左衛門同じ、是は中食あり。
　右等のことは村の旦中へ聞合（問いて確かめる）すべし。」

○六日　此日頃、伊藤氏三家、新通吉田氏、蓮久寺へ五ヶ取の雪のり半帖ずつ年頭に遣す。割前本家へは彼方より使者来る時ことづけ遣すべし。毎年二日に来る也。是に準じ仁嘉村・升潟へも遣すべし。
○十二日夜、日待御経（前夜から潔斎して読経し、日の出を待って拝む）その後説法。
（朱書入レ）「夜食あづがい出すこと、小豆一升、参詣多少によって拵置候也、
○十三日　月次御講始る。御経後説法其後五ヶ浜へ行く。
　兼て其用意いたし置かざれば甚だ迷惑する煎餅袋六十余り持参。説法諷誦の用意。本家へ年玉かたがた土産物の筆の類見合せ持参。其の夜より檀頭向取越法事がある。能々心得べし。此夜当村御講始め、寺にて勤める。
（上欄朱書入レ）
「初御講は寺にて勤候、もっとも豆ふ汁・濁酒出すこと」

――寺の自然8――

里山の花風景（初夏編）

新潟西高校教諭　藤田　久

六月になって久しぶりに寺の周辺を歩いた。スギの林縁部はヤブ状になり、ヤマアジサイの青い花が咲き出していた。反対に背丈の低いオドリコソウの純白の花が終わりかけている。今、里山には花が少ない緑一色の夏の光景がすでに広がっていて、早い季節の進み具合に戸惑ってしまう。いつもならこの季節に見かける花は果たして何があったろうかと考えながら、やぶをかきわけていた。

踊子草咲きむらがれる坊の庭
山口青邨

時期的には五月の中頃からになろうかウツギやタニウツギなどの空木の仲間をよく見かける。ウツギの花が多いのは、近くの「湯の腰登山コース」ではないかと思っている。タニウツギの方は里の低地から尾根上までよく見かける花で、どちらも1～2mほどの低木ながら白あるいはピンクの花をそれぞれヤブの中に盛り沢山つける。このため単調な色彩に明るいコントラストを与えてくれる花である。

卯の花

ウツギの花をウノハナといい、ウツギの花が略されたものである。空木と書くように茎の中が実際、中空なところから名前がきたようだが、卯月（陰暦四月）に咲くからという意味もある。

ウツギはスイカズラ科の落葉低木で枝の上部の葉の脇に円すい形の白い花をたくさん固まってつけているのでどこからでもわかる。

「卯の花のにおう垣根に時鳥早（ホトトギス）もきなきて」というおなじみの文部省唱歌「夏はきぬ」の一部にもウツギが出てくる。このように昔から庭に植えられ詩や歌にもよく読まれ、人々に親しまれている花である。この作曲は本県大潟町出身の小山作之助で明治二十九年の作品である。

だ足ながら最近、卯の花は学校にほとんど植栽されていない。ホトトギスのさえずりにいたっては里の山懐に住んでいないかぎり子供たちの耳にまで届かない。〃トーキョウトッキョ　キョカキョク〃というのがホトトギスのききなしで一度聞けばすぐ気付くのだが。妙光寺住職の娘さんたちは耳にしているはずだがどうだろう。

そもそもタイトルの「きぬ」という意味が「夏は来ない」として受け取られてはいないか気になるところである。このような否定の意味を表わすなら「夏はこぬ」と書くことになる。「きぬ」の文法的な扱いは完了であるから「夏は来た」というのが正しい。

卯の花やホトトギスの鳴声を知らない今の子供たちに、この歌詩の意味が不明のまま初夏の訪れを実感せずに歌われているとしたらこれも時代の流れだろうか。

こんなことを同僚と話題にしていたら「おから」のことも〝卯の花〟と言うことを教えてもらいびっくりした。〝きらず〟という言い方は最近、うちの年寄が使っていて知ったばかりなのだが、おからの方はまったく初耳だった。卯の花の白さが、昔からいろんなところに強烈な印象を与えてきたことを改めて知った思いがする。

押しあうて又卯の花の咲きこぼれ　正岡子規

オドリコソウ（シソ科）

タニウツギ

タニウツギは谷筋に咲く空木のことで、あでやかなピンクのロート状の花をたくさんつける。日本海沿いの山間地に分布し、初夏に荒地や田畑と接した林の周囲に普通に見られるが、角田山ではそれほどでもない。しかしウツギよりは多く生育する。

タニウツギには百以上の方言名が知られており民俗学的にもおもしろい。例を少し紹介しよう。

- マッチ花・つぼみの色がマッチの軸先と同じ色、形からくる。実にうまい表現だとこれには感心させられる。
- タウエ花・タウエ桜・5月中～下旬に咲くことから田植え時期の目安になり、農作業と結びついた名前である。
- カジ花・マッチ花の延長で、この花を家に飾ると火事になるという火に対する禁忌として伝承されている。
- ソーシキ花・ホトケ花・ヒバシギなどは焼き場で死者の骨を拾う箸に使われていたことから信仰に対する禁忌の意味にも使われている。

他の空木に、あとはツクバネウツギがある。黄白色で3～5個の花を付ける。がく片は花が終わった後に実の先に残り、その様子が羽子板でつく羽に似ていたところから名がついた。このように花の名前が農事や遊びなどに結びついていることがわかると自然ウォッチングがより一層楽しくなる。

フェスティバルにお出かけ下さい

遅い報告になりますが、三月に関東地区在住者を対象のミニフェスティバル安穏を鎌倉の円久寺で開きました。ここのご住職夫妻は妙光寺のフェスティバル安穏が縁で結ばれ、この円久寺でも安穏廟を計画しています。当日はいつもの顔ぶれに加えて初めての方、まだ申し込みはしていない方と、総勢で五十人近くになり盛会でした。

法要の後、葬送に関しての講演、午後は車座になっての話し合いで、和やかに春の鎌倉を味わいました。この場で「鎌倉にも安穏廟ができるならここにも埋葬されたい」との声がでました。そこで妙光寺が鎌倉安穏廟の一区画を求めて、新潟の会員は無料で分骨できるようにすることを提案しました。

ただ鎌倉安穏廟は土地の整理が一部必要で、もう少し時間がかかりそうです。

妙光寺安穏廟は植栽した木も根付いて、より緑が豊かになりました。また広場の管理にエンジン付き芝刈り機を通年で借用しましたので、こちらの緑もきれいになります。さらに今後、歩道の整備と水屋を建設して参拝の便をはかるよう計画しています。また一基目、二基目の年数が経過して、墓碑の文字に入れた色が一部で薄くなっています。退色しにくい塗料による補修を検討中ですので併せてお知らせします。

妙光寺では八月一日がお盆のお墓参りの日です。午前十時半から安穏廟前で合同法要を営みます。個人的に墓前での読経を希望される方は、朝六時から十時まで墓地にて随時受け付けてい

3月のミニフェスティバル

ますので、この間にお出かけください。

夏のフェスティバル安穏は八月二十二・三日です。詳しくはパンフレットをご覧ください。ことに今年のゲスト柳田邦男さんは、長年奥様が病気のうえ先ごろ次男を亡くされ、「生と死」を取材対象としても、家族の問題としても取り組んでいます。大変ご多忙で地方講演は受けないところを妙光寺の姿勢に賛同され、おいでくださいます。近くでじっくりとお話を聞ける、こんな機会はとても貴重です。

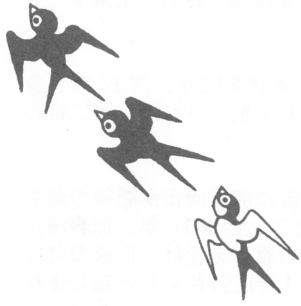
また法要の音楽は、昨年大好評だった南米ペルーの民族音楽が再度出演します。夕日と風と読経に見事に合ってとても感動的です。例年受付締め切り前に定員になっています。早めにお申し込みください。

この安穏法要に灯す大ロウソクの献灯にご協力願います。毎年百本以上並んで壮観です。一本五千円、一本ごとにお名前を入れて灯します。今年の年会費のご送金と一緒でも結構ですが、その旨通信欄にご記入ください。その年会費三五〇〇円を、同封の振り替え用紙でお近くの郵便局からご送金ください。またこの春からコンピューターでの名簿管理を始めました。住所、電話番号等の変更がありましたら必ずお知らせください。

〃寺の動き〃のページでもご報告しましたが、三基目が現在五十六件の申し込みで、総数二六二件、基金が八五〇〇万円です。その利子収入の一部、五十万円で今年から妙光寺安穏国際交流を始めます。その趣旨と内容は冒頭にお伝えした通りです。

来年がフェスティバル安穏の第十回になりますので、記念して外国からのゲストなんてことも考えています。突飛なことを、なんて思われるかも知れませんが、二十一世紀の寺と仏教を想像して幅の広い考え方をしていきたいということです。

おかげさまで安穏廟の運営は順調で、類似の永代供養墓も全国に作られつつあります。似たものが増える一方で益々安穏廟の評価が高まり、協力応援してくださる専門家も増えています。また今年の『厚生白書』（厚生省発行）にも永代供養墓のモデルとしてその内容が詳しく紹介されました。反面困ったことに、九州のある石材店が安穏廟の絵をコピーしてそのまま自分の所の宣伝に使うということまで起きています。正式に抗議しましたが、弁護士によると現行の法律では規制までは難しいとのこと。どうやら〃偽物までできるほど有名になった〃と考えたほうがいいようです。



『秋の九州、日蓮宗史跡寺院参拝と長崎・阿蘇・別府の旅』
3泊4日

主催　角田山　妙光寺

日蓮聖人の足跡こそありませんが九州は古来日蓮宗の信仰が盛んな地で知られ、博多の日蓮聖人銅像はじめ多数の史跡寺院があります。また巻町に生まれた妙光寺四十六世旭日苗上人は、松尾山光勝寺（佐賀）の五十六世という縁もあることから、団体参拝の希望が以前からありましたのでこのたび計画しました。

あわせてせっかくの九州ですから、紅葉の阿蘇山観光の他温泉を堪能します。檀家、安穏会員、それぞれの親族友人、どなたでもお誘い合わせてご参加ください。

※期　　日　　**平成10年11月17日(火)～20日(金)（3泊4日）**

※募集人員限定　　**40名（最少催行人員25名）**

※参加費用　　**145,000円**

※新潟空港発着になっていますが、県外の方が参加される場合、福岡空港合流、解散もできます。

※詳細は別紙パンフレットをご覧ください。

参拝寺院ご案内

日蓮聖人銅像護持教会（福岡市）

明治37年に建造された総高22メートルの「元寇記念日蓮聖人銅像」と、ここを護持する身延山福岡別院。福岡市の中心、県庁前東公園にあって参詣の人が絶えない。

松尾山光勝寺（佐賀県小城町）

1313年妙光寺の創立と同じ頃、千葉中山法華経寺二世の委嘱を受けて日厳上人が建立。日蓮宗の九州における最初の拠点と言われる。1433年ここに赴き中興の祖と言われる日親上人は極めて厳格な信仰で有名。伝来する寺宝も多く、参詣の人が多い。

鎮西身延本佛寺（福岡県浮羽郡）

明治初期日蓮宗が九州全域をまとめて教えの一本化を図り、同14年に身延山から日蓮聖人の分骨を祀り九州地区の霊場として創立された。第二世の佐野前励上人が博多の日蓮聖人銅像を発願された。

本妙寺（熊本市）

1585年加藤清正が大阪に建立したのが最初。後に加藤清正が肥後の領主に任ぜられ熊本城に移建された。その後消失したことで1616年、加藤清正の廟所のある現在地中尾山に再建された。細川家の尊崇を受け、同家の菩提寺妙解寺と同石の寄進を受けた歴史を持つなど、「清正公さん」と親しまれて信徒も多い。

寺庭から

活気あるなかで・・・・

境内の紫陽花が見事な花を咲かせています。同じ時期に檀家のおじさんがひと株づつ丹精こめて増やした苗を移植されたものですが、植えた場所によって成長にとても差があるのは、見ていておもしろいものです。雨に濡れた紫陽花の花、山から流れる沢ぞいにやはり檀家さんが植えられた菖蒲も大きな花をつけ、雨の妙光寺もまた味わい深くしっとりしています。

世の中は不景気の風が吹いて、右往左往している人間に比べ、自然の生業は時期が来れば変わらずに淡々と花を咲かせ、季節は流れていく、その様子になぐされられるような気がします。

妙光寺は安穏廟が全国的に有名になり、その分大きく変化しているように思えます。学術的な論文のための調査をする方、海外で研究している方の問い合わせ、同じようなお墓を作りたい方の見学、住職への講演の依頼。いろいろな人々とのご縁をいただき、活気にあふれる毎日です。十年前のお寺では想像もつかない変わりようです。

私も学ぶことや、得るものは多くなった反面、この変化について行くのがしんどいこともあります。

どんな時でもお寺の役割やあるべき姿を真摯な姿勢で考えている住職を尊敬もしますし、協力していくのが私の仕事なのでしょうが、専門的な問い合わせや、皆様のかかえていらっしゃる悩みをお聞きするのは住職でなければできません。もしこの先もどんどん忙しくなっていったらどうなるのだろうか。という不安があるわけです。

「お酒でも飲んで、住職が帰って来るまで待っててね…。」

と世間話をたくさん聞かせてもらう余裕が少なくなったのではないか。

安穏廟からはじまったこの十年、増えた仕事のために何か失ったものはないのだろうか。と気がかりになったりもするのです。

境内の一角に花の種をあれこれ植えてみました。うまく育ってお盆にはきれいに咲くといいなと思います。

小川なぎさ

行事案内

七月五日～十五日
東京方面お盆お経

住職がお伺いします。日程的に回りきれない場合は秋のお彼岸になりますので、ご了承ください。

八月一日（土）
お盆墓参り、施餓鬼法要

午前六時　墓お経受付開始
〃　十時半　安穏廟法要
〃　十一時　施餓鬼法要
昼　十二時　おとき
午後一時　説教

七月中に世話人が各家に護持会費、施餓鬼塔婆供養料をいただきに回ります。県外、新潟市等遠方の方は郵便振り替えか、この日受付にお持ちください。

八月十三～十六日
お盆棚経

例年通り住職と鎌田、それにお手伝いのお上人が手分けして全檀家に伺います。何日か知りたい方は八月十日過ぎに電話ください。予定をお知らせします。新潟地区は早めになりますので、直接ご連絡します。

八月十九日（水）
岩屋七面宮祭礼

午前十時半　本堂で法要、お加持
岩屋へ移動、法要
昼十二時　参詣者に赤飯供養
午後一時　説教

八月二十二・三（土・日）
第九回フェスティバル安穏

安穏廟の供養祭。詳細はパンフで。

九月二十三日（祭日）
秋季彼岸会法要

午前十時半　安穏廟法要
〃　十一時　彼岸中日法要
昼　十二時　おとき
午後一時　説教

あとがき

連載している毎日新聞の原稿締め切りが毎週水曜日、さらに校正といってその印刷前の点検もあり追われる日々です。一年間は長いと思いましたが、原稿を書くのは九月末までですからゴールが見えてきました。読者からの手紙も多く、内心ほっとしています。そんなわけで三月の春号をさぼり、今回も手抜きで申し訳ございません。

妙光寺もいよいよコンピューターでの名簿管理を始めました。とても便利です。郵送の方、住所、郵便番号の間違いがありましたらお知らせください。梅雨空が続きます、くれぐれもご自愛のほどを。（小川）